

平成二十九年 度

上宮中学校入学考査問題（二次）



（注意）

- （1）この問題用紙は、「開始」の放送があるまで開いてはいけません。
- （2）問題は二から三まであります。試験時間は五十分です。
- （3）解答用紙は別に一枚あります。
- （4）解答用紙には、必ず考査番号・名前を記入しなさい。
- （5）「終了」の放送で、筆記用具を置きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

吉川先生がどこからチヨウタツしてきた注タクトをにぎって、透子は無言のまま、じっと注スコアをながめている。与えられたリハーサル時間は、正味十五分くらいしかない。

「とにかく、一回、通してやってみようよ。」

注チューニングが終わると、長山くんが言い、透子がさりげない動作でタクトを振りあげた。フルートをかまえた果南は、指の先まで緊張が走るのを感じたけれど、いざ曲が始まってみると、透子の指揮はどこと言って変わったところもなく、なんだか拍子抜けするほどふつうだった。

(こんなものなのか……。)

演奏を終えて、果南が失望にも似た感覚にとらえられたとき、透子が眉間にしわを寄せ、大きくため息をついた。

「そのトランペット、注フオルテとピアノシモの意味、わかってんの？ もっとメリハリつける！」

いきなりタクトの先を突きつけられて、橋本くんがびくりと震えあがる。

「サックス！ 伸ばしてるとちゅうで息切れしない！ 注ブレスの位置、気をつけて！」

「フルート！ 高音部、もっといいねいに！」

「そっちのフルートは右手小指の押さえがあまい！」

にらまれたのは果南だ。たしかに小指の押さえがあまくなるのが、前から気になっていた。でも、一回、演奏を聴いただけで、そんなことまでわかるなんて。

「ソロ担当のクラリネット！ そんな音しかだせないの？ それとも、注リードが割れてるの？」

「あ……ちょっと、リードの調子が……。」

長山くんが首をすくめる。

二 次の1〜10の( )に入る言葉をひらがなで入れて、下の意味に合うように慣用句やことわざを完成させなさい。

- 1 ( ) に流す……過去のことを、すべてなかったことにすること。
- 2 ( ) であしらう……相手を冷たくあつかうこと。
- 3 月と( ) ……二つのものに、非常に大きな差があること。
- 4 ( ) の川流れ……名人でも、ときには失敗することもあるということ。
- 5 おぼれる者は( ) をもつかむ……困っているときに、まったくたよりにならないものでもたよりにして助かろうとすること。
- 6 ( ) の子はおかえる……子どもは親に似るということ。
- 7 ( ) に腕押し……力を入れても手ごたえのないこと。
- 8 ( ) は寝て待て……あせらずに、ちょうどよい時を待つのがよいということ。
- 9 弱り目に( ) ……困っているときに、さらに悪いことが起こること。
- 10 ( ) にも衣装……どんな人でも、外見をかざればよく見えること。

問7 Z に入る言葉を、塚本さんが語っている言葉から五字以内でぬき出して答えなさい。

問8 本文の内容を説明した文としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 塚本さんは、樹木医として仕事の現場に行くたびに、里山の風景を見ていかりがこみあげている。
- イ 私たち人間は、自分に都合のよい生活だけを求めたせいで、かけがえのない自然を失ってきた。
- ウ 木は、人間がどんな科学の力を持ってしても作れない酸素を作り出せるところがすばらしい。
- エ 私たち人間は、自分たちが一番だということをふまえて、自然を守っていかなければいけない。

「じゃ、すぐ替えて！」

次から次へと、ほぼ全員に容赦なく指示を与えると、たちまちリハーサルの割り当て時間は終わりになった。次の学校が脇で待機しているのを見て、透子はだれよりも先に A ステージを降りる。

それから本番まで、休憩どころではなかった。みんな、会場の外の駐車場に集まり、注意されたところを直すのに必死だった。透子は寒いからと言って、練習にはつきあってくれなかったけれど、そのほうがよかった。ずっとそばにいられては、緊張のあまり、練習にならなかったらう。

「こんな直前になって、今までのやり方変えちゃって、だいじょうぶなのかなあ？」

橋本くんが不安げに言う。

「何言ってるの？ こうなったら、もう波多野さんにまかせるしかないでしょ。マヨってるヒマなんかないんだから！」

弱気な橋本くんに、薫がビシッと活を入れる。薫の言うとおり、波多野透子についていくしかないのだ。

出番は最後から三番目だった。

本番のステージに上がると、果南の心臓は苦しいほどに B 脈打ちはじめる。さっき、同じこの場所でリハーサルをしたのに、客席に人が入ると、まるで印象がちがう。去年、初めてこの大会にサンカしたときだって、こんなに緊張しなかった。頭にはかっと血が上っているのに、指先が冷たい。このまま、思うように指が動かなかつたら、どうしよう……？

いつもと同じ冷静な表情の透子が指揮台上がった。部員たちをぐるりと見わたすようにしてから、注おもむろにタクトを振りあげる。透子の目がまっすぐ射るように果南を見た。その瞬間、果南のどきどきはびたりと止まる。

透子の腕が振りおろされたとき、果南には、白鳥が翼を広げて、 C 飛び立つ姿が見えたような気がした。

透子の刻むリズムがからだに浸透し、心地よい高揚感につつまれる。透子についていけば、大空のはるか高みにまでのぼりつめることができ。そんな気がした。

みんなの音がひとつになって、空気が振動するのがわかる。自分でもふしぎなくらい、なめらかに指が動く。いつの間にか、果南自身も音楽の一部になっていた。全身を流れる血が、あふれでる音に共鳴する。

音楽って、こんなにも深く、美しく、エキサイティングなものなのか――。

そうして、透子のタクトが止まった。一瞬の静寂ののち、割れるような拍手がホールに響きわたった。立ち上がって拍手する人までいる。あれはシーナと吉川先生と新藤先生だ。ほかに、つられてスタンディング・オベーションをする人がちらほら見えた。

果南は目頭が熱くなるのを感じた。この音を作ったのは吹奏楽部のみんなだ。でも、波多野透子がいなければ、成立しなかったハーモニー。透子はみんなに本物の虹を見せてくれたのだ。

「すぐく、よかった！」

薫の目にも感動の涙が光っていた。ステージから降りながら、なぜだか、みんな、ぼろぼろ泣いていた。平気な顔をしているのは、波多野透子ぐらいのものだ。

「秋山さん。」

声をかけられて振りかえると、新藤先生が立っていた。

「今の演奏、とってもすばらしかったわ。」

新藤先生は男の人といっしょだった。Dして、少したよりなさそうな感じだが、やさしいお兄さんという印象だった。この人がきつと先生の婚約者だ。

「わたしの結婚相手の伊勢崎さん。」

思ったとおり、新藤先生が紹介する。

「こんにちは。」

伊勢崎さんが、ちょっと照れたような笑顔を見せた。

問3 ――線部①「自然が悲鳴をあげている」とありますが、ここに使われている表現技法としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 直喩法
- イ 体言止め
- ウ 倒置法
- エ 擬人法

問4 ――線部②「木の働きや森林の働き」とありますが、文中で述べられている、木や森林の働きの具体例としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 梅雨の時期に水をたくさん吸収して、山が荒れないようにする。
- イ 大気中の二酸化炭素を吸収して、大気をきれいにする。
- ウ たくさんの葉っぱで地表をおおい、地球の温暖化をふせぐ。
- エ かれた後に土に返り、養分の豊かな大地をつくりだす。

問5 に入る語句としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 「樹木医のたいへんさ」や「木と自然との関係」
- イ 「植物のくわしいつくり」や「自然の偉大さ」
- ウ 「自然保護の必要性」や「地球温暖化の問題」
- エ 「木の大切さ」や「人間と自然とのつながり」

問6 ――線部③「人間が自然を操ることができると思うのは大きな過ち」とありますが、そのように言える理由を説明した次の文の

- 1 に入る言葉を答えなさい。ただし、1 は十五字、2 は十七字で文中からぬき出して、それぞれ

答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

私たち人間は 1 ため、2 から。

「だれのそばにも、さまざまな木があります。その木は、いつ、だれが植えたものでしょう。どうして、そこに植えられたのでしょうか。一本の木にも、人と同じように命があり、それぞれに生きてきた歴史があります。その木の命の重みに気づいてあげられたら、人間と木の絆も、さらに人間と自然のつながりも、よい方向に築いていけるように思います。」

塚本さんの言葉にはいつも、木に対しての情熱がほとばしっています。一人でも多くの人に、木を **Z** 気持ちを持ってもらえたらと願っていました。

(池田 まき子『木の声が聞こえますか』による。)

注 問伐……一部の木を切つてまばらにすること。

シンポジウム……複数の人が一つの問題について意見をのべたり質問に答えたりする討論会。

ごうまん……えらそうにして相手をばかにすること。

問1 —— 線部あくえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問2 **X**に入る漢字を自分で考えて答えなさい。ただし、身体の一部を表す漢字が入ります。

「秋山果南さん、だよね。いつも、貴子から噂を聞いてます。」

「え？」

初対面の男の人にフルネームで呼ばれ、果南がおどろいた顔を見ると、伊勢崎さんはおどけた表情になって、果南の耳元まで、ひよいと身をかがめた。

「教師が生徒をえこひいきするのはよくないと思うけど、ここだけの話、君は彼女のお気に入りみたいだよ。」

果南は新藤先生の顔を見た。わだかまりがすっかり消えたわけではないけれど、じっさいに先生の婚約者を目の前にしたら、先生が学校をやめて、この人についていきたいと思うのもわかる気がする。

「年度のとちゅうで退職するなんて、担任としては最低だし、そのことについては何も言い訳できないってわかってる。でも、わたし、このまま教師をやめてしまうつもりはないの。せつかくの機会だから、アメリカで勉強して、もっとパワーアップしてもどってくるわ。だから、秋山さんも教師に絶望しないでほしい。」

「先生……。」

心の中では、もう先生のことを許していたけれど、口にだして、そう言うことができなかった。でも、きっと、先生はわかってくれている。「わたし、あなたと波多野さんが同じステージに立ってるのを見て、こんなにうれしいことなかった。あの波多野さんに音楽をとりもどしてあげたなんて、あなた、すごいわ。」

「透子……。透子は？」

先生の言葉にはっとして、果南はあたりを見回した。透子がない。いつの間にか透子がいなくなっている。

「透子！」

透子の姿を求めて、果南は駆けだしていた。ホールの外に出ると、あたりはもう暗くなりかけていた。前方に階段を下りようとしている後ろ姿が目に入る。果南は階段のところまで全速力で駆けていき、そこから大声でさげんだ。

「波多野透子！ あんた、やっぱり、音楽やめちゃダメだよ！ 波多野透子は音楽が好きなんだ。ううん！ 音楽に愛されてるんだよ！」  
透子が足を止め、果南のほうに振りかえった。

「結果でたの？」

「ううん。知らない。でも、入賞に決まってる。だって、すばらしかったもん。」

「当然よ。このわたしが指揮したんだから。」

透子がクールに言いきった。

「そうか。そうだよ。波多野透子にとっちゃ、一番が当たり前なんだ。しかも、こんな地味なコンクールだし。」

「でも、X」

「ほんと？」

「え、思いがけないハンノウに胸がおどり、果南は階段を駆けおりて、透子の前に立った。」

「ピアノ、ほんとにもう弾けないの？ 透子なら、なんとかなるんじゃないの？」

透子が自分の目の前に両手を広げ、じっと見つめた。見た目にはわからなかったけれど、透子が軽く手をにぎったとき、左手の薬指と小指がきちんと閉じないことがわかった。

「この指じゃ、どうがんばったって、もう前と同じには弾けないでしょうね。」

「……………」

果南は今、初めて、透子の失ったものの重さを知った。透子には、完ぺきな音楽をつむぎだす能力があった。それなのに、怪我したことで、自分が自分に要求する水準にけっして到達することができなくなってしまったのだ。それは、どれほどの苦しみのだろう。果南には、どうして想像することができない。ピアノを弾いている限り、埋められないギャップに永遠にもがきつづけなければならぬのだ。

「一番にならなきゃ、ダメなの？」

「るおかげで、私たちは呼吸していられます。一枚一枚の葉っぱが大きな役目を担い、そして、たくさんの木々が私たち人間の命を支え、地球を守ってくれているのです。」

塚本さんは光合成・炭酸同化作用のしくみをわかりやすく説明し、樹木が私たち人間にとって、さらにこの地球にとって、どんなにかけがえのないものかを語ります。

「今はウチユウまで行ける時代。けれども、どんなに科学が進歩しても、人間は葉っぱ一枚すらつくることはできません。将来、どんなに技術が発達しようとも、それだけは不可能なのです。私たちは、自然に逆らっては生きていけないのですから、自然の前にもっと謙虚であるべきではないでしょうか。木の命に目を向け、木の声に耳を傾け、木をいたわることを考えてほしいのです。」

塚本さんは木の代わりになって、心から訴えます。

最近では、地球の温暖化への関心も高まり、二酸化炭素が地球をおおうために地球の温度が上がり、南極や北極の氷が溶けだして海面が上昇したりすることを、多くの人が心配しています。

地球の将来が危ぶまれ、動物や植物への影響が懸念されるにつれ、「地球の環境を守ろう」、「自然を保護しよう」などと声高に論じられています。

それをふまえて、塚本さんは疑問を投げかけます。

「環境を守ろうとか、自然を守ろうなど、それは注ごうまんな考え方ではないでしょうか。私たち人間こそ自然の恩恵を受け、守られているのです。自然に依存しなければ生きていけないのです。それは昔も今も、そして、これからも変わらないことなのです。」

塚本さんは樹木医としてさまざまな木と関わるうち、木や自然のすばらしさに気づかされました。自然の偉大さを実感し、木や自然に対しておそれうやまう気持ちを持つようになりました。

③ 人間が自然を操ることができると思うのは大きな過ちで、地球上で自分たちこそが一番などと思いつくことがあれば、そのしっぺ返しはいつかきつと受けることになるのではないかと案じていました。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

塚本さんは病気が回復すると、また古木の治療をするために各地を回り始めました。

仕事の現場への行き帰りに、車や電車の窓から景色をながめていると、うっそうとした森林が目に入ってきます。

表面的にはきれいな緑ですが、<sup>注</sup>間伐もされていない森林が多く、どんどん荒れてきています。

(このまま放っておけば、森林の役割、機能は果たされなくなって、ただの荒れ山になるばかり……。)

すさんだ山々や弱った木々を見てはXが痛み、手入れされていない里山の風景を見ては、さびしい気持ちになりました。

日本はこの五十年、経済面でめざましい発展を遂げ、先進国と呼ばれるようになりました。けれども、自然がどんどん破壊され、きれいな空気、キヨらかな水、豊かな大地が失われてきました。自然との調和をかえりみず、<sup>い</sup>ベンリな生活だけを求めたせいで、私たちはかけがえないものをなくしてしまったのです。

(日本は四季の移り変わりがあって梅雨もあるから、ほかの国々に比べたら緑がたくさんあるけれど、その自然が悲鳴をあげている。けれども、ほとんどの人は自然から遠ざかった生活をしていて、自然の移り変わりを意識することもないから、それに気づくことさえもない。)

塚本さんは仕事柄、自然の変化には敏感にならざるを得なく、人と自然との関係について思いをめぐらすこともたびたびです。

(日本は国土の三分の二が森林で、木の国と言ってもいいほどなのに、<sup>②</sup>木の働きや森林の働きについてはあまり理解されていない。私たちが生きていくために不可欠な水も酸素も土も、そして海の恵みも、すべて木や森林が育んでくれたものであることを知ったら、木の見方も変わってくるはずなのだけれど……。)

塚本さんは、木々のおかげで私たちが暮らしていただけることを、もっと多くの人に知ってほしいと思わずにはられません。

塚本さんは樹木医としてのギョウセキが評価されるにつれ、講演会や<sup>注</sup>シンポジウムに招かれることも多くなりました。そんなときは、樹木医の仕事を通して見つめたYなどをテーマに話をしています。

「木や植物は、光合成で空気中の二酸化炭素を吸いこんで、酸素を吐き出しています。大気中の二酸化炭素を吸収してきれいにしてくれてい

果南がきくと、透子はふっと<sup>注</sup>自嘲的に笑い、そして果南に背を向けた。

「透子！ それでも……それでも、お願いだから、あきらめないで！」

⑦ 夕暮れの中を去っていく背中に向かって、果南は夢中でさげんだ。

(松本 祐子『8分音符のプレリュード』による)

注 タクト……音楽の指揮棒。

スコア……楽譜。

チューニング……楽器の音程を合わせること。

フォルテとピアノシモ……音楽の強弱を表す用語で、「強く」と『弱く』よりもさらに弱く」という意味。

プレス……息つき。

リード……管楽器などで、空気をふきつけると振動して音を発する部分。

おもむろに……静かにゆっくりと。

スタンディング・オベーション……立ち上がって拍手かっさいすること。

自嘲的……自分で自分をあざ笑うこと。

問1 — 線部あゝえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問2 — 線部 a 「拍子抜けする」・ b 「活を入れる」の文中での意味としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「拍子抜けする」

- ア 緊張が急にゆるんで張り合いがなくなる
- イ とつぜんのことにおどろきあきれる
- ウ 期待どおりにならなくて腹立たしくなる
- エ まったく物足りなくて不満に思う

b 「活を入れる」

- ア 大声を出してはげしくおこる
- イ 刺激をあたえて気力を起こさせる
- ウ こらしめるために肩を強くたく
- エ ものすごい勢いで不満をぶつける

問3 — 線部①「一回、演奏を聴いただけで、そんなことまでわかるなんて」とありますが、このときの果南の気持ちとしてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア ばかにする気持ち。      イ おどろく気持ち。      ウ 逆らう気持ち。      エ がっかりする気持ち。

問4 — 線部 A と D に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア がっしりと      イ ふわりと      ウ きゆうきゆうと      エ ひよろりと      オ さっさと      カ どきどきと

問5 — 線部②「なぜだか、みんな、ぼろぼろ泣いていた」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 透子のとてもきびしい練習からようやく解放されると思ひ、うれしかったから。

イ 果南が最高の演奏をする中、自分たちがミスをしたことがぐちゃかったから。

ウ 今までにないくらい最高の演奏ができ、大会で入賞できたことがうれしかったから。

エ 透子の指揮のもと、みんなが音楽と一体となって気持ちが高ぶり、感動したから。

問6 — 線部③「の」と同じ働きの「の」を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 友だちの本をかりる。      イ かれが転校生の田中くんだ。

ウ 歌を歌うのが好きだ。      エ 母の作った料理はおいしい。

問7 — 線部④「先生のことを許していた」とありますが、先生のことのようなことに対して怒っていたのですか。解答らんに合うように文中から十二字でぬき出して答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

問8 — 線部⑤「全速力」と成り立ちが同じ熟語を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 音楽室      イ 市町村      ウ 初体験      エ 開会式

問9 — 線部 X に入る透子のせりふとしてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア けっこう楽しかった。      イ 入賞したのは意外だった。
- ウ 二度とやりたくない。      エ ほんとにくだらなかつた。

問10 — 線部⑥「透子の失ったもの」とは何ですか。文中から十四字でぬき出して答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

問11 — 線部⑦「夕暮れの中を去っていく背中に向かって、果南は夢中でさげんだ」とありますが、このときの果南の気持ちを説明した次の文の 1 3 に入る言葉を答えなさい。ただし、1 は三字、2 は五字、3 は七字で文中からぬき出し、それぞれ答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

- 1 があつたとしても、本当は 2 である透子には、けっして 3 ほしい。